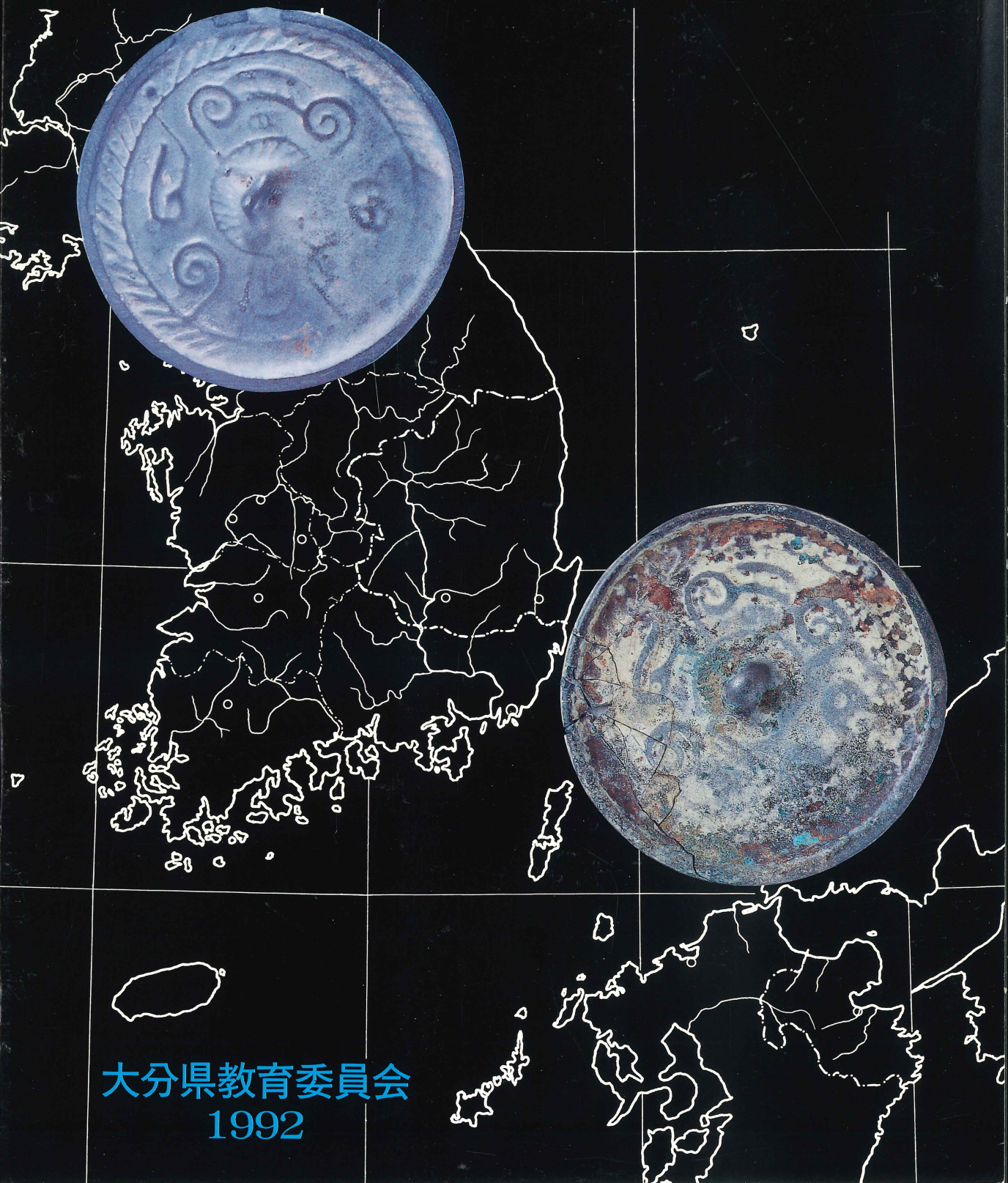
日韓シンポジウム

先史・古代の日韓交流と大分

弥生～古墳時代の文明交流



大分県教育委員会
1992

日韓シンポジウム

『先史・古代の日韓交流と大分』

－弥生～古墳時代の文明交流－

主催　大分県教育委員会

日時　平成４年２月２日

会場　大分市コンパルホール（文化ホール）

日程

９：30　受付

10：00　開会・講師紹介

10：10　基調講演『考古学からみた日韓交流』
　　賀川　光夫（別府大学教授）

11：10　講演『韓国の初期農耕文化』
　　尹　容　鎭（慶北大学校教授）

12：00　昼食・休憩

13：00　講演『北部九州（大分）の弥生文化と半島系遺物』
　　小田富士雄（福岡大学教授）

13：50　講演『新羅・伽耶の古墳文化』
　　崔　秉　鉉（韓南大学校副教授）
　　通訳　亀田　修一（岡山理科大学助教授）

14：40　講演『北部九州（大分）の古墳文化と半島系遺物』
　　西谷　　正（九州大学教授）

15：30　休憩

15：40　シンポジウム
　　コーディネーター　西谷　　正（九州大学教授）
　　清水　宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第１係長）
　　パ ネ ラ ー　各講師

16：30　閉会

表紙・韓国式小銅鏡　上は漁隠洞出土、下は石井入口出土

はじめに

大分県は、『豊の国』という名の示すとおり、豊かな自然と風土に恵まれているところから、先史・古代の遺跡が数多く残されています。そうした遺跡の中には、新羅地方をはじめとする韓国と密接なかかわりをもつ文物が多く発見されており、韓国と本県の交流の深さを知ることができます。

特に、水稲農耕を始めとして金属器や須恵器・馬具・甲冑など大陸の先進文化がもたらされた弥生・古墳時代は日本の歴史の上で重大な変革期であったと同時に、国際化の進んだ時代でもありました。そして、大分の地から出土した韓国に由来する遺物・遺跡は如実にその事を物語っています。

近年「近くて遠い国」といわれてきた韓国との様々な交流が活発化していますが、本県と韓国との文化交流の歴史を学ぶことは、今後の国際交流に一段と寄与するものと確信します。

今回の日韓シンポジウムには、両国から斯界の第一人者の先生方に御出席いただいており、心から御礼申し上げます。このシンポジウムの開催により歴史と文化を通して両国間の相互理解を深め、更に地域文化の振興と国際親善の一助になれば幸いです。

平成４年１月22日

大分県教育委員会教育長
宮　本　高　志

考古学からみた日韓交流

賀　川　光　夫
別府大学教授

1966年６月、長崎県西彼杵郡野母崎町脇岬遺跡の発掘に韓国の考古学者金廷鶴教授（当時高麗大学）を招いて調査が行われた。砂丘を深く発掘すると韓国釜山市影島区東三洞貝塚発見の櫛目文土器（日本の曽畑式土器）が出土し、この土器を以て日韓両国が先史時代より深い文化の絆によって結ばれていたことを確認しあった。そしてこの発掘が日韓両国初の記念すべき合同調査となった。

1974年８月、大分県直入郡荻町龍宮洞穴の発掘が行われた。櫛目文土器の真相を探索し、加えて日韓古代の交流史を明らかにする目的の調査で、韓国から崇實大学林炳泰、全南大学崔夢龍（現ソウル大学）の両教授が来日し、発掘が行われた。この発掘では韓国の櫛目文土器の源流に迫ると見られる爪形文に似た櫛歯並列文を施す丸底の土器がみつかった。この土器について林、崔両教授は韓国からの輸入土器ではないかとの見解を示され、数日間にわたって熱心な討論が行われた。結論としてこの5000年前の櫛目文土器が日韓最初の交流の遺物として認知しようということになった。1986年新たに改装なったソウル国立中央博物館の開館記念にあたり、日本先史時代コーナーに荻町龍宮洞穴の櫛目文土器が韓炳三館長の希望により、日韓古代文化の真相解明の資料として展示されたことは慶びにたえない。

北部九州の弥生前期、板付式土器と韓国可楽式土器との類似要素に始まる土器要素の関係は、やがて金海式土器の直接の交流となり、多紐細文鏡、銅鈴（小銅鐸　宇佐市別府遺跡）の出土によって韓国南部特に洛東江流域との交流が顕著となった。弥生中期になると韓国では銅剣に代わって鉄剣、鉄戈が現れ、多紐細文鏡に代わって、草葉文鏡、星雲文鏡、日光鏡など前漢鏡が多くなる。福岡県立岩遺跡のカメ棺から出土した鉄戈と前漢鏡はこの様な交流を現したものといえる。中国の史書三国志倭人伝、弁辰伝に見られる交流の時代に九州地方で流行したと考えられる中広形、広形銅戈と銅矛が、慶尚南道金海市良洞里や馬山市固城東外洞などから出土しさらに内陸の慶尚北道大邱市晩村洞にまで到達している。この事から弥生時代後期に日本からの文物が韓国南部に多く見られることも注意しておきたい。

古代、新羅の中心は慶州であって古都の周辺の山に分布する史跡は韓国の歴史と文化を代表するものばかりである。慶州石窟庵の石仏、南山の各所に見られる石仏群はしばしばわが大分県の磨崖仏との関係について議論され、わが国石仏の像造問題に大きく関与しているといわれ

・かがわ　みつお
・1923年生
・日本大学卒業
・主要著作『大分県の考古学』(吉川弘文館)、『農耕の起源』(講談社)、編「ふるさと誕生」『大分の歴史』、監修『大分県史』「先史編Ⅰ・Ⅱ」ほか

ている。1977年11月第二回韓国考古学会がソウルの崇實大学で開催され、招待された私は学会終了後新羅の古都慶州を訪問し、発掘の行われていた皇龍寺に調査主任の崔秉鉉副教授を訪ねた。副教授は遺跡と遺物の細部を案内してくれ、宝相華唐草の画塼の拓本をくださった。そこに広がる伽藍は広い範囲におよび、東アジア最大と言われる遺跡はまさに圧巻と言うべきものであった。皇龍寺の発掘は1967年から83年の長期に渡って行われ、貴重な仏教美術の数々が発見された。さて新羅時代に建設された寺の塔は石塔であるのに対して皇龍寺は木造九層塔として建造さている。このことは、その後のわが国の木造塔の建設技術に影響をあたえたことになるものとして注目されてる。

新羅様式の多様・華麗な瓦・塼の技術は七世紀後半、白鳳時代から奈良時代にわたり北部九州に伝来し、太宰府都府楼遺跡発見の画塼にその様子を見ることができる。この画塼は新羅様式の宝相華文様で覗き唐草文様を四隅に配置し、中央に集合する複雑な花文を現した慶州皇龍寺址発見の画塼、雁鴨池址の画塼の系統を引くものであった。また華麗な新羅様式の軒先瓦は太宰府から豊前地方に広く分布し、田川市天台寺址の瓦の文様に強く顕現されている。豊前海沿岸平野を南下した新羅文化は白鳳期には宇佐平野に到達し、虚空蔵寺創建の軒先瓦に足跡を残している。

宇佐八幡と田川香春神社は、銅鏡奉納を以て深く通じ、共に新羅神との関係が深いとされている。とくに田村圓澄九州歴史資料館長は宇佐八幡は次の理由から、新羅神ではないかとして興味ある見解を述べている。１、八幡神を司祭する神官が合議態勢をとること、２、独特の託宣を発する神であること、３、出張する特異な神であることをあげる。以上の特徴をもつ特異な宇佐八幡の神の存在は、日本在来の特定の土地と人を守る産土神とは凡そ違った性格の神と考えなければならない。

宇佐八幡を総社として古代・中世の間に全国各地に八幡社が創設されることは、ある意味で、日本における新羅文化の普及であり、古代における豊国と新羅との交流に果たした歴史の絆は日本文化の生成発展に大きな足跡になっている。

韓国の初期農耕文化

尹　容　鎭
大韓民国慶北大学校教授
韓国大学博物館協会長

初期農耕の事情と、稲作の韓半島伝来、ないし拡散に関する問題などは、韓国文化形成の研究において、解決しなければならない課題の１つであります。しかし、韓国では、今まで得た資料と研究成果だけでは、可視的に説明することが難しいのです。

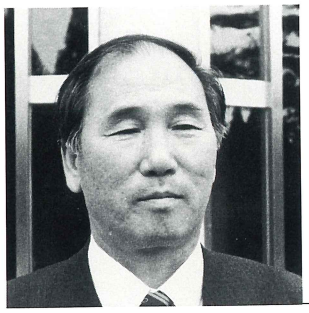
韓国では、初期農耕の事情把握に接近する方法を次のように行なっています。１つは、栽培作物に対する農学的研究であり、１つは、農耕行為によって発生する文化に対する研究です。前者は、栽培された植物体に対する、品種・生態などの農生物学的研究分野と言え、後者は、栽培をするために使った農具などの有形文化と、栽培の事実を直間接に反映した民俗学などの生活文化を研究する分野であります。

韓国では、農耕の開始を櫛文土器文化期においています。櫛文土器文化期とは、B.C.5000～B.C.1000年の間に存続した文化で、土器の器形と施文型式によって、地域性と分期を設定しています。

櫛文土器文化期での穀物の存在が確認できた最古の遺跡は、平壌三石区域の南京遺跡と、黄海道鳳山の智塔里遺跡であります。これらの遺跡の住居址から、炭化した粟・唐黍・稷が出土しています。また、栽培を間接的に証明する資料も、数ケ所でみつかっています。発見された穀類は、稲を除いた畑作の禾穀類であり、中国大陸の高緯度地域で、先史以来、栽培されてきた作物であります。

ここで、推理でありますが、この文化段階での穀物栽培は、収穫量が小量であったと思います。そのため一般生活において、これらの作物は貴重な特殊食品として取り扱われたと考えられます。古代の文献記録に、農耕と関連した祭典が盛大に行われた様子が描写されているのは、このことを反映したものと言えます。

韓国で稲の存在が確認された最古の遺跡は、平壌三石区域南京遺跡36号住居址、忠清南道扶餘松菊里遺跡54－１号住居址、京畿道驪州欣岩里遺跡12・14号住居址、であります。これらの遺跡は、無文土器文化期に該当する時期です。今までの資料では、稲作の開始が無文土器文化期の早い時期であったと言えます。無文土器文化期とは、大体、B.C.1000～B.C.300年頃まで存続した文化であり、石器・土器の型式分類によって多くの地域性と分期が設定されています。



・ユン　ヨンジン
・1931年生
・ソウル大学校卒業
・主要著作「大邱の初期国家形成過程」『東洋文化研究』、共著『大伽耶古墳発掘調査報告書』ほか

無文土器文化の遺跡は、櫛文土器文化の遺跡よりもはるかに分布地域が広く、また稠密です。さらに、土器・石器類の器種が多いのです。こうした現象は、社会・文化の発展の速度が速かったと言えますし、長期貯蔵用の穀物栽培技術の発達と関連があるのではないかと思います。

ここで１つ考えられるのは、貴重な品種であった穀物の量産は、社会文化の水準に比例すると言えることです。また、同じ自然条件では、穀物の生産拡大、ないし稲作拡散経路が、文化水準の高低関係によって、間接的ながら説明できるのではないかと思います。

北部九州(大分)の弥生文化と半島系遺物

小　田　富士雄
福岡大学教授

朝鮮半島と一衣帯水の間にある北部九州では先史時代以来文物の交流があった。水稲と金属器に代表される弥生文化の原型は西紀前4世紀代にさかのぼって玄界灘地域に到来した。その水田稲作技術は当初から完成された高度な段階のものであり、各種の磨製石器のほか鉄器も登場しており、やがて弥生時代前期後半（板付II式土器文化期）までには、ほぼ西日本全域に拡散し、定着するにいたった。

つづく朝鮮半島からの大きな文化の波は前期末頃（前2世紀代）に到来した。半島系の後期無文土器文化と本格的な青銅器文化の伝来である。細形型式の剣・矛・戈からなる青銅武器・工具（鉇）・小銅鐸・小銅鏡などが中期（～後1世紀代）にかけて流入した。そして武器や小銅鐸はただちに福岡、佐賀地域でコピーされた国産化が開始されている。

大分県下でも近年半島に直結する青銅器の発見があり学会の注目を集めた。

1．韓国式小銅鐸……宇佐市別府遺跡

1977年に発見されたこの小銅鐸はわが国発見韓国式小銅鐸の第1号で、以来後続資料の発見はない貴重品である。復原総高11.6センチで、韓国慶尚北道月城郡入室里遺跡発見の第1号小銅鐸と形状・法量ともに最も近似している。

2．韓国式小銅鏡……竹田市石井入口遺跡

1981年に発見されたこの小銅鏡は韓国慶尚北道永川郡漁隠洞遺跡発見のB群鏡（3面）と同笵鏡を構成している。なお漁隠洞遺跡からは6種11面の小同鏡が発見されているが、そのうちA群鏡（4面）と同笵鏡は慶尚北道大邱市坪里洞遺跡（1面）、佐賀県三養基郡二塚山遺跡（1面）で発見されている。

以上大分県内発見の2例の韓国式青銅器はいずれも弥生時代終末期の住居跡から発見されていて、韓国側の西紀1世紀代より下らない年代観を参照するとき、少なくとも1世紀間以上の年代的開きを認めねばならない。佐賀県二塚山遺跡の漁隠洞A群系小銅鏡は弥生後期初頭頃の甕棺から発見されていて、1世紀代に入手していることが知られる。したがって小銅鐸、小銅鏡ともに1世紀代までに北部九州に伝来したのち、伝世したことが考えられる。また青銅器に含まれる鉛の同位体比の測定によって原料の産地を推定する方法によれば、小銅鐸は遼寧省を含む中国北部の鉛、小銅鏡では石井入口鏡（B群）が朝鮮系鉛を、二塚山鏡（A群）が中国

・おだ　ふじお
・1933年生
・九州大学大学院修士課程修了
・主要著作『九州考古学研究』全５巻（学生社）、『九州古代文化の形成』上・下巻（学生社）、共編『日韓交渉の考古学』(六興出版）ほか

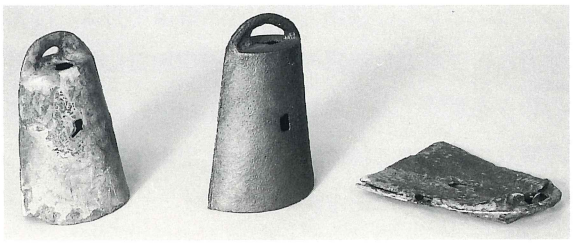
（前漢鏡）系鉛を使用していることが知られている。このことは韓国で遼寧系、中国系の青銅器を原料にした場合や韓国産青銅を使用した場合のあった可能性を示しているであろう。

このほか大分市下郡遺跡出土の銅鉇（中期初頭）はその先端部のみであるが、現在福岡・佐賀・熊本県下でも７例の発見がある程度の珍しいもので、韓国でも最も近いところでは慶尚南道金海市会峴里遺跡の甕棺墓出土例があり、いちはやくわが国に伝来した青銅器の一つである。

さらに伝玖珠町仲平や三光村佐知原遺跡では細形銅剣があるが、舶来品か国産品かはにわかに断定し難い。

後期には北部九州産青銅器の一部が慶尚南北道地域に輸出されている。中広形・広形型式の銅矛・銅戈・小銅鏡などがあるが、なかでも1965年大邱市晩村洞遺跡で発見された中広形銅戈は、茎部に半同心円文が鋳出されていて、直入郡久住町久住神社蔵の銅戈との近似が注意されている。

また鉄器でも板状鉄斧、素環頭刀子など半島出土品と対照されるものがあり、今後の比較検討が待たれる。



韓国式小銅鐸
左、入室里１号鐸
右、宇佐市別府鐸
中、　〃　の復原品

韓国式小銅鏡
左、漁隠洞Ａ群鏡
右、佐賀県二塚山鏡

新羅・伽耶の古墳文化
—墓制の変遷を中心として—

崔　秉　鉉
大韓民国韓南大学校副教授

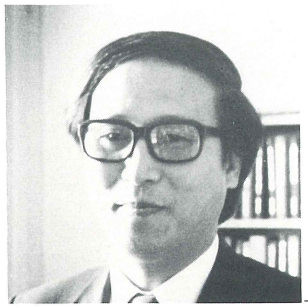
『三国志』魏志　東夷伝によると、西暦3世紀まで現在の韓半島嶺南地方には辰韓と弁韓の諸勢力が分かれて存在していた。

新羅・伽耶の早期のこれら辰・弁勢力が採用していた主な墓制は、西北韓地方から南下した土壙墓であった。B.C.100年頃、嶺南地方で出現する土壙墓は、はじめ土壙木棺墓としてはじまったが、西暦2世紀後半には土壙木槨墓へと転換した。この土壙墓に貴金属工芸品や馬具が認められないのは、魏志　韓伝に記録されている三韓の生活相と一致している。

西暦4世紀前半、慶州には積石木槨墳という北方アジア系の新しい主要墓制が到来し、新羅・伽耶の古墳文化は前期に入っていった。積石木槨墳は、川原石の積石部屋の中に木槨を設けた独特の埋葬主体部とともに、封土（盛土）と川原石で円形に高く積み上げ構築したものであり、貴金属工芸品、馬具、挂甲といった新しい文物を伴う。これは、基本的に騎馬文化的なものであった。

慶州に積石木槨墓が出現した以後、嶺南地方の土壙木槨墓は、竪穴式石槨墳へと転換していった。しかし、嶺南の竪穴式石槨墳地帯は、慶州の積石木槨墳と同質性をもった洛東江東岸地方と、これとは異質の洛東江西岸地方に分かれていくが、これは政治的には新羅圏と伽耶圏の分立を意味するものであった。嶺南の竪穴式石槨墳地帯では、4世紀後半から長方形平天井の横穴式石室墳と横口式石槨墳が出現するが、これは竪穴式石槨墳に横穴式のアイデアを加味し変形したものである。

6世紀前半に慶州勢力は横穴式石室墳を受入れ、新羅・伽耶の古墳文化はその後期へと転換した。慶州に最初に登場した横穴式石室墳は、在来式の長方形石室墳であるが、統一新羅時代末までの後期のほぼ全期間にわたり認められる主要墓制は、高句麗から南下した方形プランの穹窿（ドーム）状石室墳であった。慶州勢力が、彼らの固有墓制であった積石木槨墳と厚葬を放棄し、新しい墓制と薄葬を採用した背景には、6世紀前半における新羅の改革的な雰囲気と仏教のうらづけがあったものと考えられる。

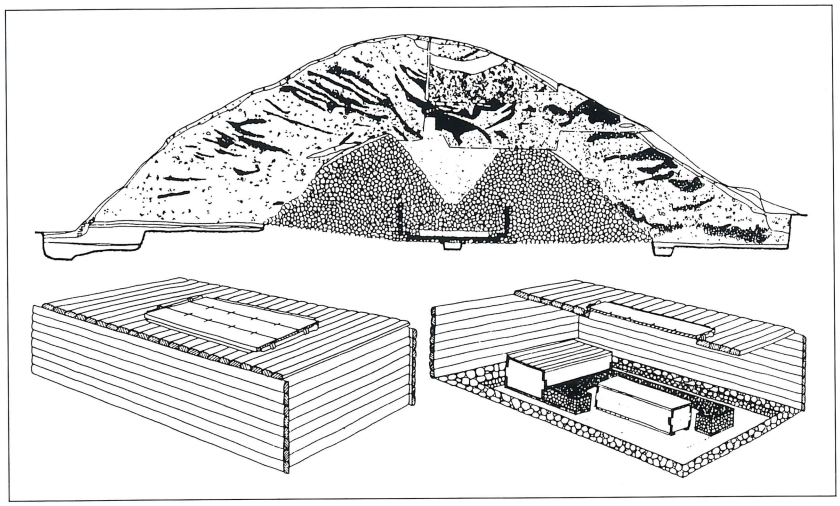


・チェ　ビョン　ヒョン

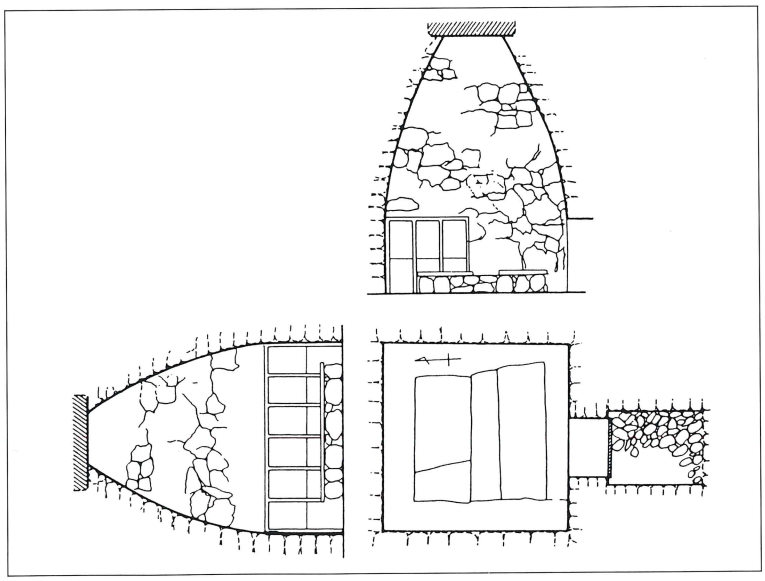
・1948年生

・崇實大学校卒業

・主要著作『新羅古墳研究』、「新羅積石木槨墳の変遷と編年」
『韓国考古学報』ほか



積石木槨墳、天馬塚墳丘断面と木槨（想定復元）



横穴式石室、伝神徳王陵石室

北部九州(大分)の古墳文化と半島系遺物

西　谷　　正
九州大学教授

北部九州の大分の古墳文化のなかに、古代の朝鮮半島と直接・間接に関係の深い遺物なり文化を探るとき、まず最初に取り上げたいのは、日常的な生活用具としての土器の問題である。古墳時代の土器といえば、一般には、土師器と須恵器がある。土師器が、弥生土器いらい変遷してきた日本在来の軟質土器であるのに対して、須恵器は5世紀中ごろ前後に朝鮮渡来の技術で製作が開始された硬質の土器である。須恵器は、古代朝鮮の三国時代でも、主として加耶（任那・加羅）の土器がモデルとなっているが、出現期のそれをとくに「初期須恵器」と呼んで、5世紀後半以後に普及する定型化したものと区別している。初期須恵器のころには、いっぽうで加耶などからもたらされた舶載品がときどき見受けられ、それらに対しては陶質土器と呼ばれている。そして、それらの初期須恵器と陶質土器のどちらとも判断できないものもときには見られる。ともあれ初期須恵器は、それほど加耶など古代朝鮮直系の技術で製作されたことを物語るとともに、陶質土器の発見と合わせ考えると、渡来技術者なり人びとの存在さえうかがわせる。そのような陶質土器もしくは初期須恵器の器台が、大分市の下郡遺跡E区1—12地点1号住居跡から見つかっているのである。ただし、初期須恵器とした場合は、その生産地は、おそらく大和政権が所在した近畿地方であったと思われる。そして、日田市の小迫原遺跡朝日第2地点H地区で採集されている壺や器台の破片は、初期須恵器に入るであろう。

つぎに、日常生活にもっとも係わりの深いもので注目されるのは、作り付け竈の問題である。竪穴式住居内の調理もしくは暖房の施設としては、縄文時代以来炉が知られる。これは普通、住居内の床面の中央付近に、地面を少し掘りくぼめただけのかんたんなものである。ところが、古墳時代中期の5世紀中ごろから、竪穴式住居の壁面に作り付けた竈が散見しはじめ、6世紀後半以後、広範に普及していくのである。そのような竈の古い例を、宇佐市の野口遺跡3号住居跡や下毛郡三光村の佐知遺跡11号住居跡などで見い出すのである。両者はともに、5世紀の後半ないしは末期のものであるが、土師器のなかに把手付の甑という新しい器種を伴なっている。実は、作り付け竈は、北部九州と近畿の二地域で、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてごくわずかであるが認められるものであり、また、そのころの朝鮮半島の南岸地方で知られるので、朝鮮渡来の新しい生活様式の一つと見るべきものである。

ところで、佐知遺跡で作り付け竈をもつ住居が営まれていたころ、そこから北方に1キロ余

・にしたに　ただし
・1938年生
・京都大学大学院修士課程修了
・主要著作『韓国考古通信』(学生社)、共著『加耶から倭国へ』(竹書房)、「古代朝鮮のあけぼの」『世界の大遺跡』10(講談社)編『古代朝鮮と日本』(名著出版)ほか

りのところに当たる上ノ原横穴墓群では、最初の横穴の造墓が始まっている。この横穴墓群からは、須恵器にカラスガイ・ハマグリなどの貝殻やウリが遺存していたり、また、装身具としての銅釧が出土している。前者は、死者の来世での食物として供献されたものであるが、新羅・加耶そして百済古墳では、魚・貝・鳥・鶏卵などの骨や殻がときどき検出されるので、やはり古代朝鮮における葬送儀礼の影響を受けたものとして理解すべきであろう。さらに銅釧についても、上ノ原横穴墓群出土のものには、外周面に玉を連ねたような表現が認められ、6世紀中ごろの新羅の古墳である慶州市普門洞の夫婦塚（婦塚）出土の銀釧の型式を想起する。

古墳の出土品では、鉄素材としての鉄鋌の出土が注意にのぼる。臼杵市の下山古墳は、5世紀前半の前方後円墳であるが、その後円部中央に埋置された家形石棺の棺外から26枚以上の鉄鋌が出土している。これらの鉄鋌は、その形態的特徴や成分組成から考えて、新羅もしくは加耶の地域からもたらされたことはいうまでもない。

さて、巨大古墳の世紀と呼ばれる5世紀は、手工業製品において種々の技術革新が展開した時期でもある。前述の初期須恵器のほかにも、馬具の普及とりわけ金銅製品の出現、そして、甲冑における鋲留技法の採用などが目を引く。それらの例を別府市の太郎塚古墳出土の鏡板や、竹田市の扇森横穴出土の短甲などに、それぞれ類例を見い出す。さらには、日田市のガランドヤ2号墳出土の直刀の鐔で検出された銀象嵌の装飾文様も注目に値する。この古墳は6世紀後半に築造されたものであるが、日本における象嵌技法は5世紀後半に始まる。このような新しい手工業技術は、加耶をはじめとする古代の朝鮮南部に発源地が求められる。

最後に、ガランドヤ1号墳の装飾壁画に関連して、模写を担当された日下八光氏が四神図の存在を指摘されていることである。もしそうだとすれば、筑後川を下った福岡県浮羽郡吉井町の珍敷塚や日の岡の古墳に見られる高句麗古墳壁画と共通する題材とともに、高句麗との関係も検討しなくてはなるまい。

関係遺跡

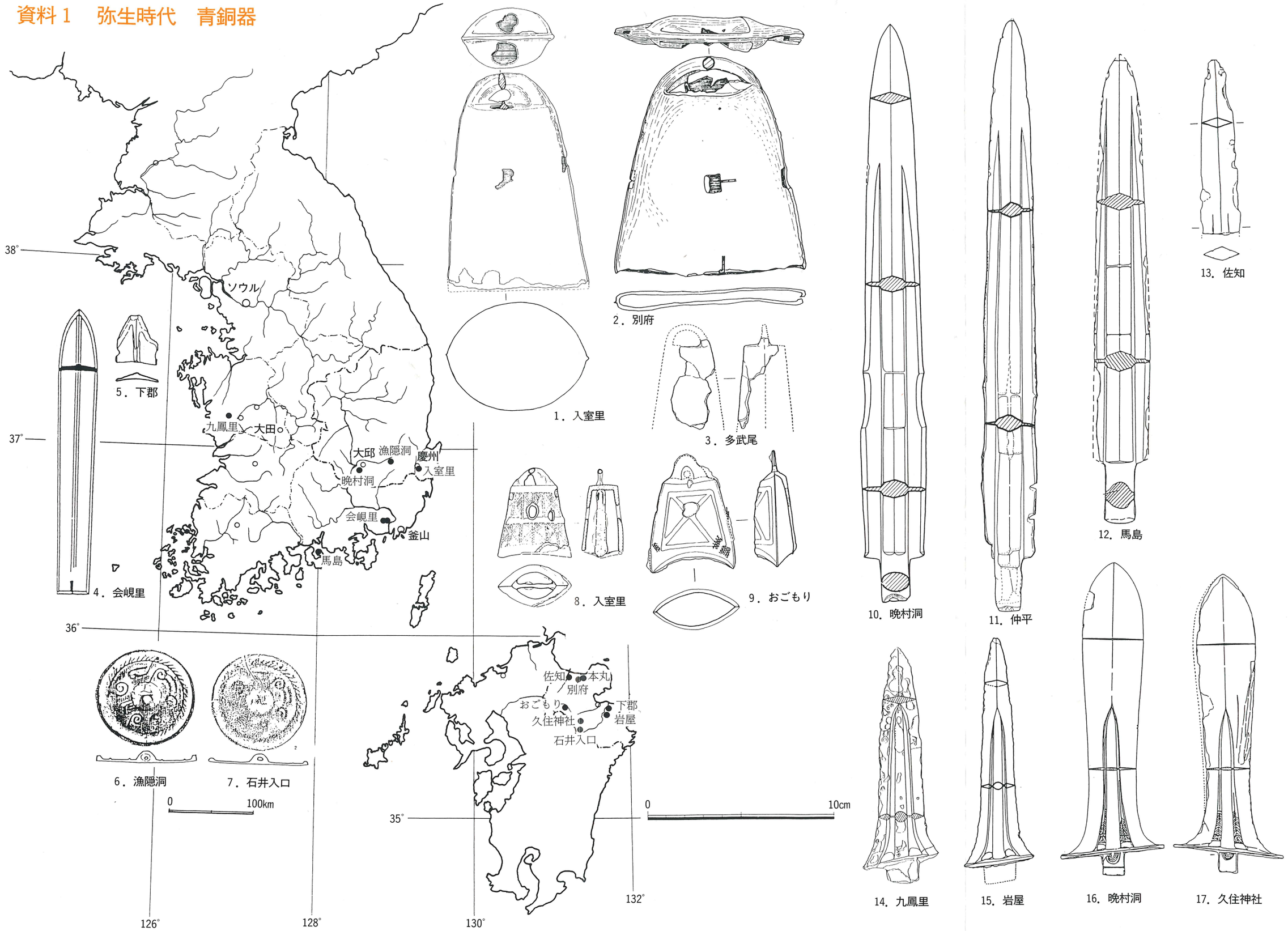
韓国

入室里遺跡	慶尚北道月城郡
漁隠洞遺跡	〃　琴湖邑
晩村洞遺跡	大邱直轄市
九鳳里遺跡	忠清南道扶餘郡
会峴里遺跡	慶尚南道金海市
馬島遺跡	〃　三千浦市
朝陽洞遺跡	慶尚北道慶州市
金丈二里遺跡	〃　月城郡
茶戸里遺跡	慶尚南道義昌郡
松菊里遺跡	忠清南道扶餘郡
山浦遺跡	慶尚南道居昌郡
燕巌山遺跡	大邱直轄市
月城路29号墳	慶尚北道慶州市
池山洞古墳	〃　高霊郡
鳳渓里古墳	慶尚南道陜川郡
校洞古墳	〃　昌寧郡
礼安里古墳	〃　金海郡
夫婦塚	〃　梁山郡
玉田古墳	〃　陜川郡
福泉洞古墳	釜山直轄市

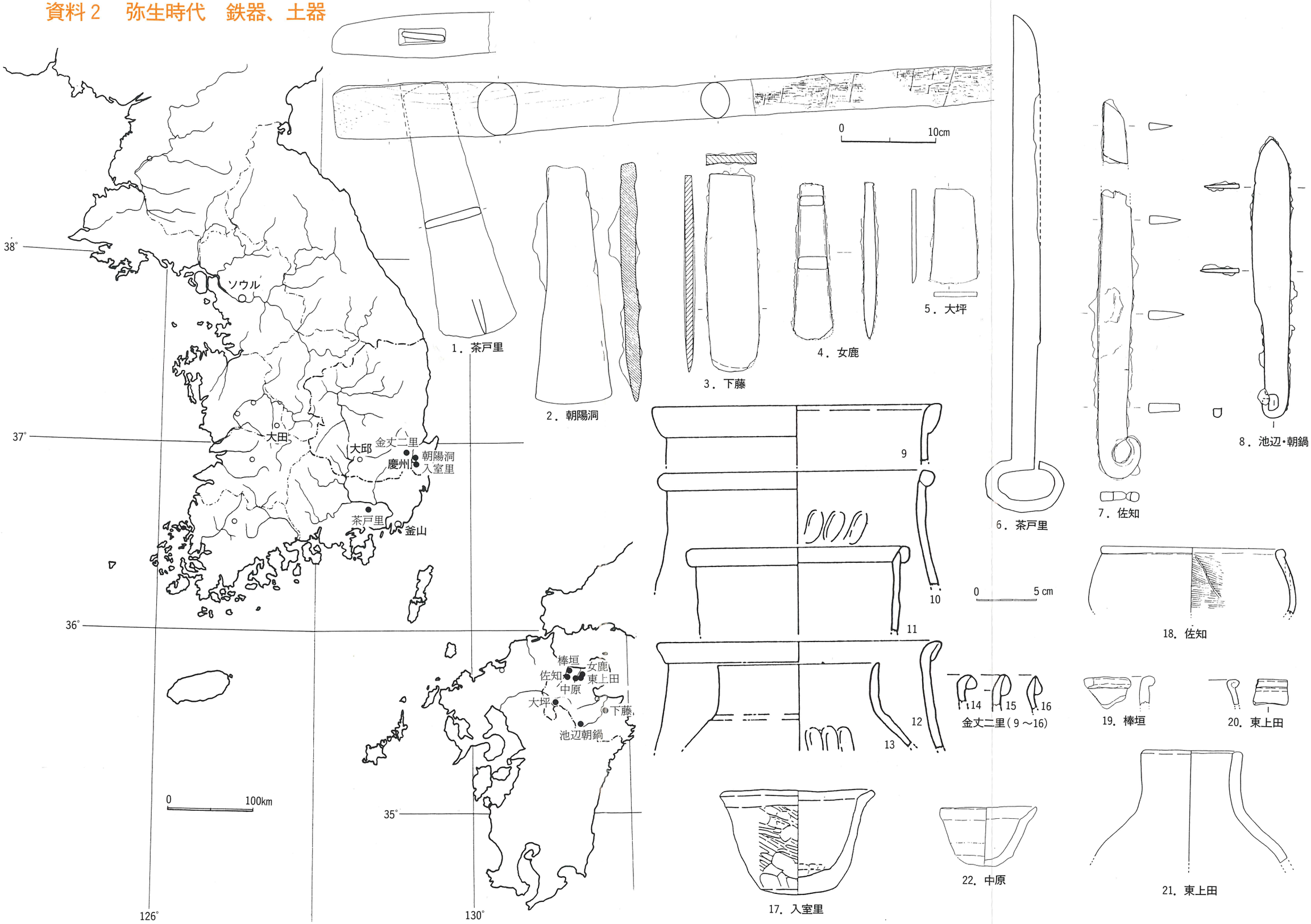
大分

佐知遺跡	下毛郡三光村
別府遺跡	宇佐市
下郡遺跡群	大分市
岩屋遺跡	〃
おごもり遺跡	玖珠郡玖珠町
久住神社	直入郡久住町
石井入口遺跡	竹田市
棒垣遺跡	中津市
女鹿遺跡	宇佐市
東上田遺跡	〃
中原遺跡	〃
下藤遺跡	大野郡野津町
大坪遺跡	日田郡天瀬町
池辺・朝鍋遺跡	竹田市
吹山遺跡	日田市
宇戸遺跡	日田郡天瀬町
原田遺跡	大野郡千歳村
城山19号墳	中津市
上ノ原横穴	下毛郡三光村
免ケ平古墳	宇佐市
御幡1号墳	〃
上ン坊古墳	大分市
小迫墳墓群	日田市
船岡山遺跡	玖珠郡玖珠町
岬古墳	西国東郡香々地町
飛山横穴	大分市
下山古墳	臼杵市
扇森山横穴	竹田市

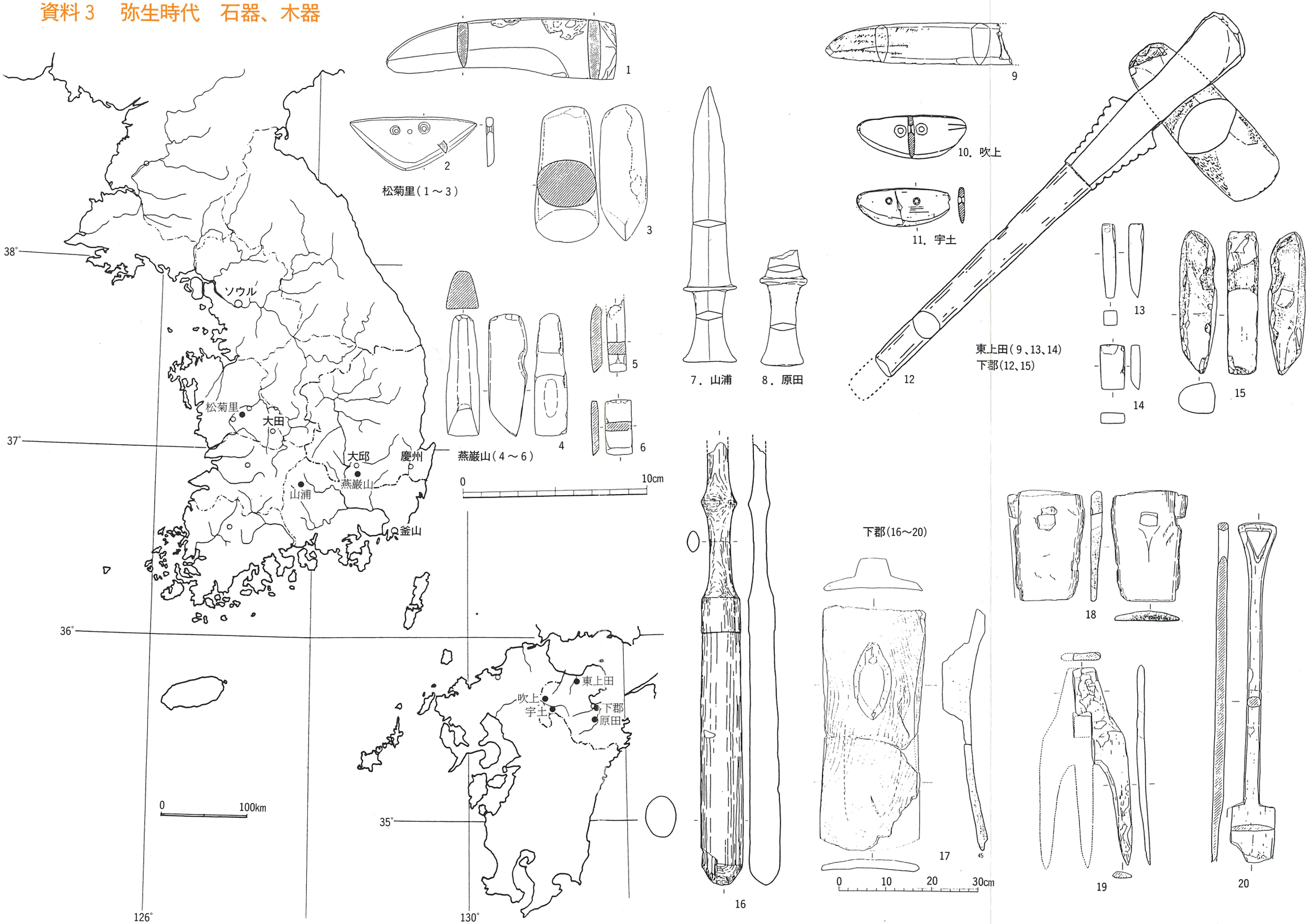
資料１　弥生時代　青銅器


38°
37°
36°
35°
126°
128°
130°
132°
ソウル
九鳳里
大田
大邱
漁隠洞
慶州
入室里
晩村洞
会峴里
釜山
馬島
佐知
本丸
別府
おごもり
下郡
岩屋
久住神社
石井入口
0
100km
0
10cm
1．入室里
2．別府
3．多武尾
4．会峴里
5．下郡
6．漁隠洞
7．石井入口
8．入室里
9．おごもり
10．晩村洞
11．仲平
12．馬島
13．佐知
14．九鳳里
15．岩屋
16．晩村洞
17．久住神社

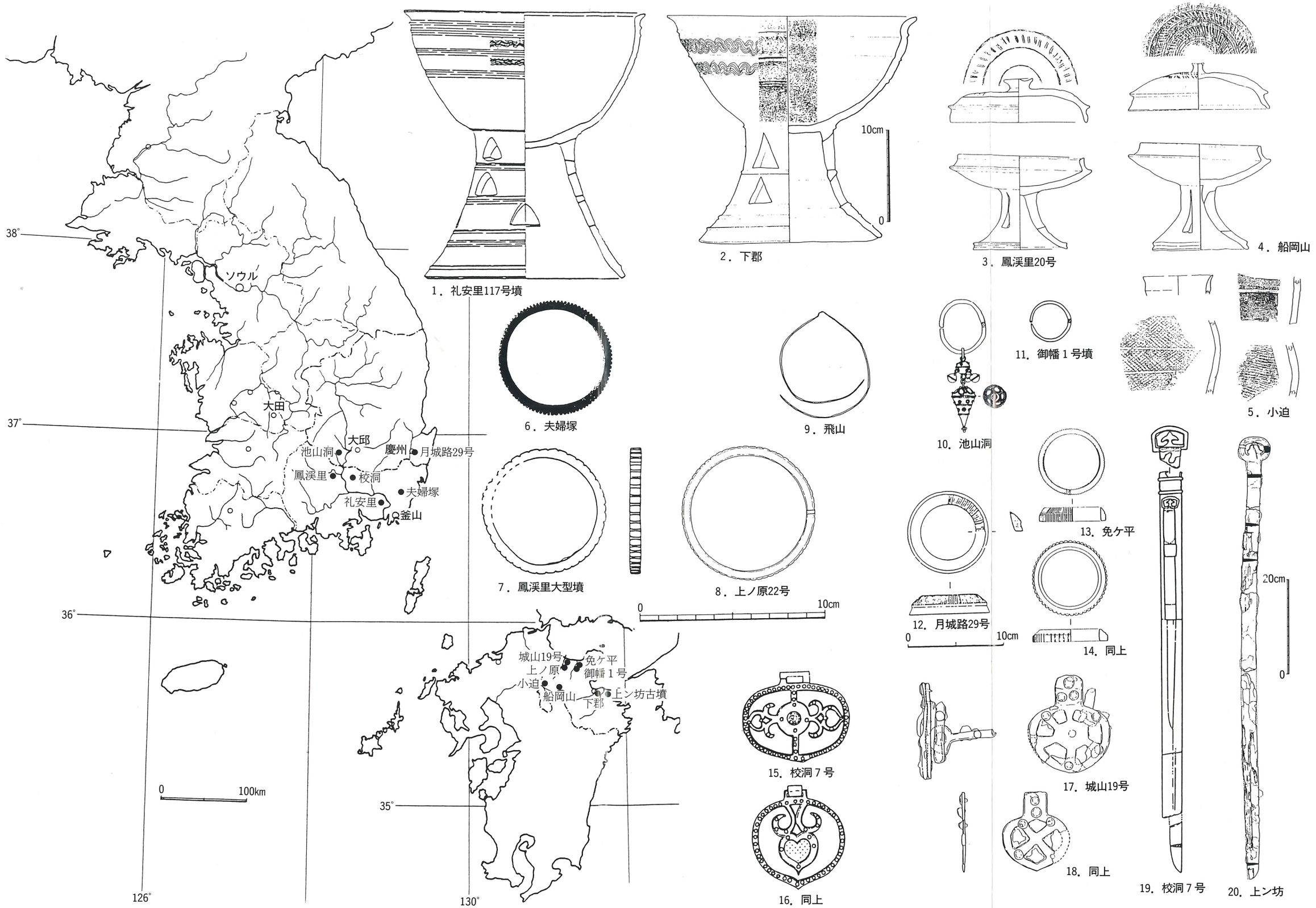
資料２　弥生時代　鉄器、土器



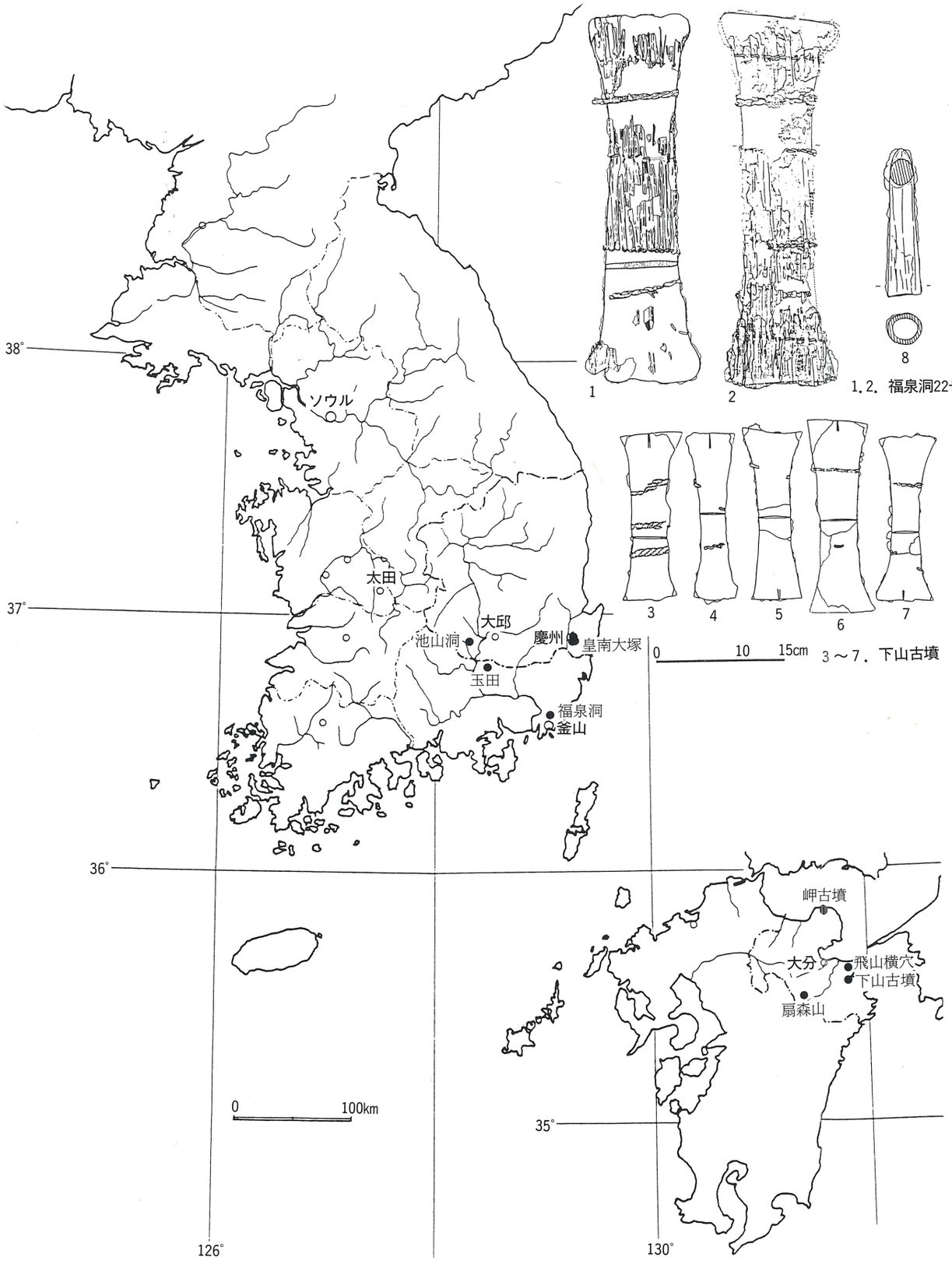
資料３　弥生時代　石器、木器



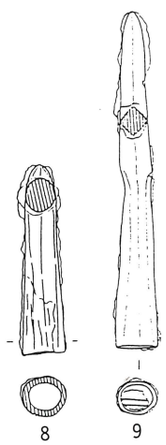
資料４　古墳時代　土器、釧、耳飾、鏡板、杏葉、太刀

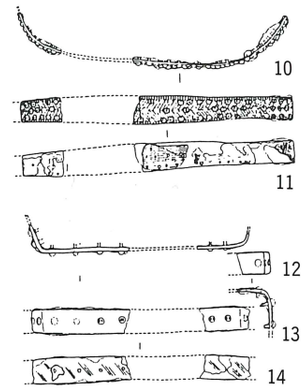


資料５　古墳時代　鉄鋌、馬具、短甲ほか

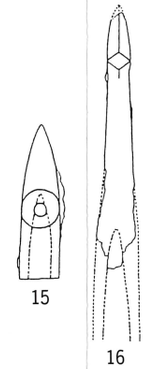


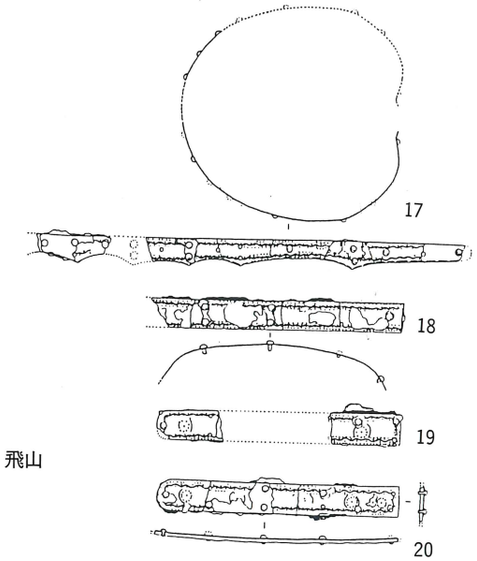
1．2．福泉洞22号墳





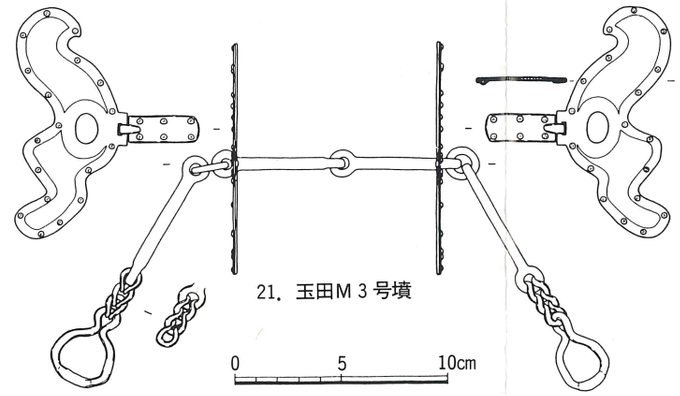
8～14．玉田Ｍ３号墳



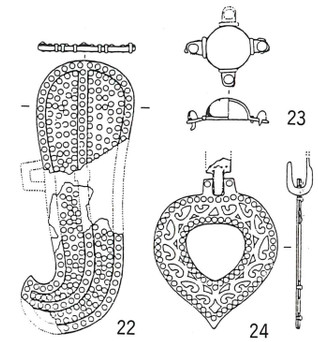


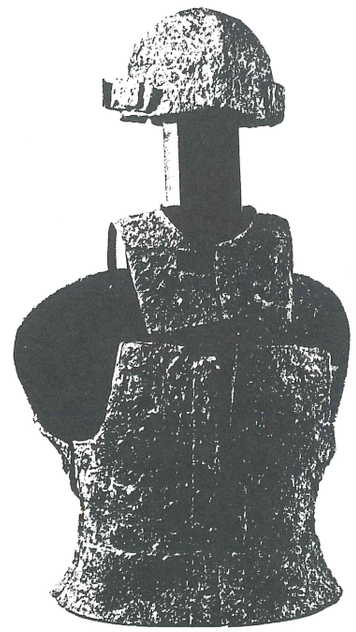
15～20・22～24．飛山

3～7．下山古墳

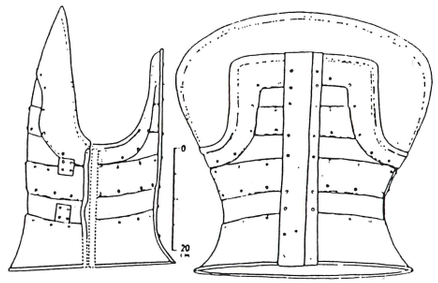


21．玉田Ｍ３号墳

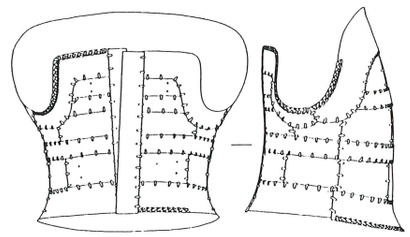




25．池山洞32号墳



26．扇森山横穴



27．岬古墳

日韓シンポジウム

『先史・古代の日韓交流と大分』

－弥生～古墳時代の文明交流－

出品者・協力者（敬称略・順不同）　北九州市立考古博物館、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、大分市歴史資料館、中津市教育委員会、宇佐市教育委員会、大分市教育委員会、臼杵市教育委員会、竹田市教育委員会、玖珠町教育委員会
尹容鎭、李白圭、金鐘徹、崔秉鉉、沈奉謹、朴廣春、西谷正、亀田修一、賀川光夫、小田富士雄、武末純一、後藤宗俊、小倉正五、佐藤良二郎、栗焼憲二、甲斐忠彦、山田拓伸、段上達雄、木村幾多郎、玉永光洋、坪根伸也、菊田徹、木戸誠、横山啓二

発　行　　大分県教育委員会

事務局　　大分県教育委員会文化課
〒870　大分市府内町3－10－1
ＴＥＬ　0975－36－1111（内線4271～4276）

印　刷　　佐伯印刷株式会社
〒870　大分市大字古国府1155－1
ＴＥＬ　0975－43－1211